

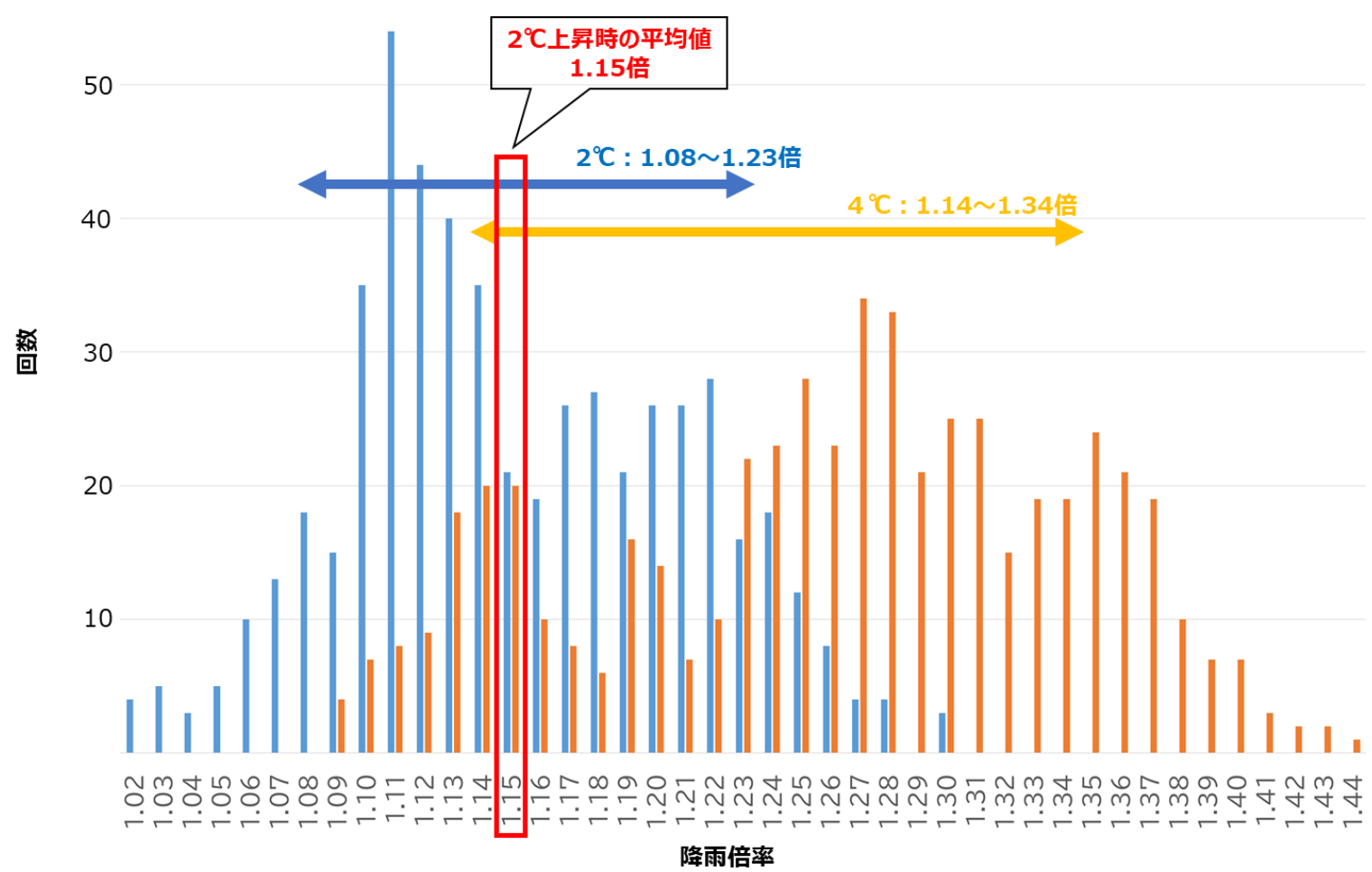
令和7年1月8日(水)
令和6年度 第3回
大阪府河川整備審議会

資料3

気候変動を踏まえた今後の治水対策の進め方について

【審議結果】

- 国の「気候変動を踏まえた治水計画のあり方（提言）」にある手法により、大阪府域での降雨量変化倍率を算出したところ、世界平均気温2℃上昇時の海面水温パターンのシナリオ毎の平均値の幅は1.08～1.23倍。4℃上昇時で1.14～1.34倍となった。
- 2℃上昇時の平均値が1.15倍であり、また、4℃上昇時の海面水温パターンのシナリオ幅に含まれることから、気候変動を踏まえた基本高水流量の検討にあたっては、**1.15倍を基準**とすることとした。



※ 2℃、4℃の降雨量変化倍率は産業革命以前に比べて全球の世界平均気温がそれぞれ2℃、4℃上昇した世界をシミュレーションしたモデルから算出

令和6年度第1回及び第2回治水専門部会での審議結果

【審議結果】

- 気候変動の影響を考慮した流量を安威川、穂谷川、佐野川で算出するとともに、流域内のため池、田んぼ、公園・校庭等の持つ治水機能を検証したところ、流量増分をカバーできる可能性がある流域がある一方で、流域内の施設だけでは不足する流域もあることが分かった。
- これまで大阪府は下流から順次河道改修を進めてきているため、まずは**現整備計画による河道整備については着実に推進**させる一方で、気候変動による降雨量増大や計画規模以上の洪水への対応として、これまで大阪府が進めてきた「逃げる」「凌ぐ」「防ぐ」施策を組み合わせた『**手戻りの無い治水対策の進め方**』について**流域個別での検討を進める必要がある**。

項目		安威川流域 (1/100)	穂谷川流域 (1/100)	佐野川流域 (1/30)
現 基本高水流量 (m ³ /s)	ピーク	1,245	202.3	151.3
	計画 (切り上げ)	1,250	210	160
気候変動の影響 (降雨倍率1.15倍) をふまえた基本高水流量 (m ³ /s)	ピーク	1,463	232.7	164.3
	計画 (切り上げ)	1,500	240	170
流域内施設の治水機能による 基本高水流量の低減量 (m ³ /s)	田んぼ	44	14.3	8.2
	校庭貯留	8	1.4	1.5
	集合住宅 (棟間貯留)	4	1.5	0.3
	公園貯留	3	2.6	0.0
	ため池貯留	1	2.9	5.5
	ダム事前放流	17		
	全施設考慮	78	22.7	14.5
気候変動の影響により増加した計画 (切り上げ) 流量 - 低減量 (全施設考慮) ※流域対応の治水効果が発揮される場合に不足する流量 (m ³ /s)		172	7.3	0

令和6年度第3回大阪府河川整備審議会【資料3】の修正について

・令和6年度第3回大阪府河川整備審議会【資料3 気候変動を踏まえた今後の治水対策の進め方について】におきまして、委員の意見を受けて、以下のとおり修正を行いました。

	修正前	修正後
ページ	1 ページ	1 ページ

修正箇所	-
------	---

(以下を追加)
 ※2℃、4℃の降雨量変化倍率は産業革命以前に比べて全 球の世界平均気温がそれぞれ2℃、4℃上昇した世界をシミュレーションしたモデルから算出

ページ	1 ページ	1 ページ
-----	-------	-------

気候変動の影響を考慮した流量を安威川、穂谷川、佐野川で算出するとともに、流域内のため池、田んぼ、公園・校庭等の**施設効果**を検証したところ、流量増分をカバーできる可能性がある流域がある一方で、流域内の施設だけでは不足する流域もあることが分かった。

項目		安威川流域 (1/100)	穂谷川流域 (1/100)	佐野川流域 (1/30)
現計画流量 (m ³ /s)	計画 (丸め)	1,250	210	160
	ピーク	1,245	202.3	151.3
気候変動の影響 (降雨倍率1.15倍)をふまえた流量 (m ³ /s)	計画 (丸め)	1,500	240	170
	ピーク	1,463	232.7	164.3
流域対応による低減量 (m ³ /s)	田んぼ	44	14.3	8.2
	校庭貯留	8	1.4	1.5
	集合住宅 (棟間貯留)	4	1.5	0.3
	公園貯留	3	2.6	0.0
	ため池貯留	1	2.9	5.5
	ダム事前放流	17		
	全施設考慮	78	22.7	14.5
1.15倍後の計画流量 - (現計画流量+低減量 (全施設考慮)) ※流域対応を考慮した場合でも不足する流量 (m ³ /s)		172	7.3	0

気候変動の影響を考慮した流量を安威川、穂谷川、佐野川で算出するとともに、流域内のため池、田んぼ、公園・校庭等の**持つ治水機能**を検証したところ、流量増分をカバーできる可能性がある流域がある一方で、流域内の施設だけでは不足する流域もあることが分かった。

項目		安威川流域 (1/100)	穂谷川流域 (1/100)	佐野川流域 (1/30)
現 基本高水流量 (m ³ /s)	ピーク	1,245	202.3	151.3
	計画 (切り上げ)	1,250	210	160
気候変動の影響 (降雨倍率1.15倍)をふまえた基本高水流量 (m ³ /s)	ピーク	1,463	232.7	164.3
	計画 (切り上げ)	1,500	240	170
流域内施設の治水機能による基本高水流量の低減量 (m ³ /s)	田んぼ	44	14.3	8.2
	校庭貯留	8	1.4	1.5
	集合住宅 (棟間貯留)	4	1.5	0.3
	公園貯留	3	2.6	0.0
	ため池貯留	1	2.9	5.5
	ダム事前放流	17		
	全施設考慮	78	22.7	14.5
気候変動の影響により増加した計画 (切り上げ) 流量 - 低減量 (全施設考慮) ※流域対応の治水効果が発揮される場合に不足する流量 (m ³ /s)		172	7.3	0